整理番号

D－2－3　　919

標 題 名

食糧増産運動関連チラシ２件

著 者 名

発行者名

宮城県

発 行 年

昭和２３，２４

製作年月

平成２９年３月

食糧増産運動に伴う病害虫防除

昭和二十三年、二十四年

宮　城　県

食糧一割增産運動に伴ふ病害虫の防除法

第一　種籾消毒

一、ホルマリン消毒法

イ、消毒液……ホルマリン五〇倍液（ホルマリン一合　水四升九合）。補充液……ホルマリン二五倍液（ホルマリン一合　水二升四合）。

ロ、方法　二日間浸水した籾を笊に取り、充分水を切り、ホルマリン五〇倍液を盛つた桶に浸し、藥液のよく行きわたるようにかきまぜ、二〇分後取り出し、十文字に重ねて藪いた濡莚の中央に山盛りに堆積し、四隅を折つて籾を包み、三時間後包みを解いて水洗ひし、再び普通のように浸水する。二回目以降は、藥液の減つた量丈けを、ホルマリン二五倍液で補つて、續行する。

ハ、注意　（一）　一日に消毒出來得る量だけを順次に浸種すること。

（二）　消毒前の種籾の浸水は二日間を嚴守すること。

（三）　堆積被覆中は、籾の乾燥しないように注意し、乾燥の虞のある場合は、如露で散水すること。

（四）　同一液を一〇回位まで反覆使用すること。

二、水銀製劑消毒法

イ、消毒液　ウスブルン、或はメルクロンの一〇〇〇倍液（藥五〇瓦　水一斗四升）。

ロ、方法　所定期間の浸種を終り、芽出し及び播種前の籾をウスブルン、或はメルクロンの五〇〇倍液（藥五〇瓦水二斗八升）。補充液―ウスブルン、或はメルクロンの五〇〇倍液に濡莚で被覆し、全体の消毒時間を一二時間になるようにしてもよい。二回目以降は、藥液の減量丈けをウスブルン或はメルクロンの五〇〇倍液で補つて、續行する。

ハ、注意　（一）　膿切後消毒する場合には、藥害を起すから、催芽後の消毒は避けること。

（二）　同一液を四回位まで反覆使用すること。

第二　稻苗腐敗病

一、ボルドウ液或は銅製劑液撒布

イ、藥劑　六斗式ボルドウ液（硫酸銅一二〇匁　生石灰一二〇匁　水六斗）又は王銅或はクポイド液（藥一二―一五匁　水一斗）。

ロ、撒布期及び回數　芽二―三分及び五―六分に伸びた頃の二回。

ハ、方法　溫暖曇天無風の日を選び、苗代の水を落し、藥劑を噴霧機或は如露で一坪五合位の割で撒布し、數時間經つてから灌水する。

ニ、注意　芽の二―三分に伸びない前に撒布すると、藥害があるから、注意すること。

二、ウスブルン液撒布

イ、撒布期及び回數　播種後五―七日目頃から一―二回。

ロ、方法　一坪當りウスブルン三―四匁を水一升位に溶かして注ぎ込み、苗代の水を二寸位に保つて置く。水持ちの惡い苗代、又は苗腐敗病が出はじめたなら、前の方法を再び繰り返して實施する。

ハ、注意　水持ちの甚しく惡い苗代では、播種してから五日目頃と、その後七日目位に、ボルドウ液の場合に準じて、ウスブルン一〇〇倍液（藥五〇瓦　水二斗八升）を噴霧機で撒布すること。

第三　稻熱病

ボルドウ液　或は銅製劑液撒布

イ、藥劑　六―八斗式石灰二―三倍ボルドウ液（硫酸銅一二〇匁　生石灰二四〇―三六〇匁　大豆展着劑類二四―三二匁）、又は王銅液（藥一二〇匁水一石大豆展着劑類四〇匁）、或はクポイド液（藥一二〇匁水一石）。

ロ、撒布期及び回數　七月中旬（分けつ期）、七月下旬（穗乃子期）及び八月上旬（穗揃期）の三回。

ハ、撒布量　反當、六―八斗以上。

ニ、注意　（一）　撒布は、發病狀況により斟酌の上、早目に行ふこと。

（二）　發病を認めたならば、病葉を摘採するか、又は刈り取つた後で、撒布すること。

（三）　ボルドウ液は、出穗以後には八斗式石灰三倍ボルドウ液を撒布すること。

（四）　噴霧口は穗から一尺以上を隔てゝ撒布すること。

（五）　開花中に撒布すれば、籾穀を黑變することもあるが、收量には惡影響がないから、發病の激しいときには躊躇することなく續行すること。

第四　麥類銹病及び赤かび病

石灰硫黃合劑、或は水和硫黃劑液撒布

イ、藥劑　三二度石灰硫黃合液の一〇〇倍液（原液一升水一石　大豆展着劑類五〇匁）。

ロ、撒布期及び回數　五月中旬（出穗直前）、五月下旬（出穗揃）及び六月上旬（乳熟期）の三回。

ハ、撒布量　反當　一石―一石五斗

ニ、注意　（一）　撒布期は發病の狀況により斟酌すること。

（二）　被害は霖雨の多い場合に激しいから、葉上の露の乾く程度の晴間があつたなら、遲滯なく撒布すること。

（三）　展着劑として石鹼類を用いないこと。

第五　馬鈴薯疫病及びてんとうむしだまし

藥劑撒布

イ、藥劑　六斗式ボルドウ液（硫酸銅一二〇匁　生石灰一二〇匁　水六斗大豆展着劑類一八匁）、又は王銅液（藥一五〇匁　水一石　大豆展着劑類三〇匁）、或はクポイド液（藥一五〇匁　水一石）。てんとうむしだましの發生した場合は砒酸石灰液（藥二〇〇匁　水一石　大豆展着劑類三〇匁）。

ロ、撒布期及び回數　六月上旬（開花始）、六月中旬（開花盛）及び六月下旬（開花終）の三回。

ハ、撒布量　反當六斗―一石二斗。

ニ、注意　（一）　ボルドウ液又は銅製劑液の撒布は、馬鈴薯增收上效果が顯著であるから、病害虫發生の有無に拘らず、必ず實行すること。

（二）　ボルドウ液、又は銅製劑液撒布と共に、砒酸石灰液撒布の必要ある場合には、前記の藥液一石に對し砒酸石灰二〇〇匁を溶かして撒布すること。

（三）　展着劑として石鹼類を用いないこと。

第六　甘藷黑斑病

溫湯消毒

イ、溫湯の溫度　攝氏四七―四八度

ロ、浸漬時間　二〇―四〇分。

ハ、寸法　種薯の場合には、四〇分間浸漬消毒してから、直に苗床に伏せ、苗の場合には、一〇〇本位宛を一束とし、二―三個所をたばね、その株元二―三寸を一五分間浸漬消毒してから植える。

ニ、注意　貯藏用の種薯には健全なものを選び、ウスブルン八〇〇倍液（藥五〇瓦　水二斗二升）に一五分間浸漬消毒し、蔭乾後貯藏すること。

昭和二十三年三月

宮城縣
宮城縣農業會

昭和二十四年度

食糧増産運動に伴う病害虫防除必行事項

一に計畫
二に準備
三に早期發見
四に共同防除

【稻】

第一

一、種籾消毒

1、水銀製剤消毒法

1、薬剤　消毒液……ウスプルン又はメルクロンの一〇〇倍液（薬五〇瓦、水二斗八升）。補充液……ウスプルン又はメルクロンの五〇〇倍液（薬五〇瓦、水一斗四升）。

2、方法　所定期間の水浸しを終り、芽出し及び播種前の籾をウスプルン又はメルクロンの一〇〇〇倍液に一二時間浸ける。又は二―三時間浸けた後引きあげ、十文字に重ねて敷いた濾莚の中央に山盛りに推積し、四隅を折つて籾を包むか、洗つておいた肥桶などに入れ、蓋をして、全体の消毒時間を一二時間となるようにしてもよい。二回目からは、消毒液の減つた量だけを、補充液で補つて続行する。

3、注意

㈠腹切れ後に消毒すると、薬害を招くことがあるから、芽を出した後の消毒は避けること。

㈡同じ液を三回ぐらいまで繰り返して使用すること。

㈢消毒時間を短縮したいときは、一〇〇倍液（薬五〇瓦、水五升六合）に一五分間ぐらい浸した後、濾莚などで包み、全体の消毒時間を三時間とすること。

二、ホルマリン消毒法

1、薬剤　消毒液……ホルマリンの五〇倍液（ホルマリン一合、水二升九合）。補充液……ホルマリンの二五倍液（ホルマリン一合、水二升四合）。

2、方法　二日間水に浸した籾を笊にとり、水をきつて、ホルマリンの五〇倍液を盛つた桶に浸し、消毒液のよく行きわたるようにかきまぜ、二〇分の後に取り出し、水銀製剤消毒法のときと同じように濾莚で包むか、肥桶などに入れ、三時間後にとりだして水洗いを行い、再び普通のときと同じように水浸しする。二回目からは、消毒液の減つた量だけを、補充液で補つて続行する。

3、注意

㈠種籾は一日に消毒できる量だけを順次に水浸しすること。

㈡種籾の消毒前の水浸しは二日間を厳守すること。

㈢被覆消毒中は、籾の乾燥しないように注意し、乾燥する心配のあるときは、如露で散水すること。

㈣同じ液を一〇回ぐらいまで繰り返して使用する事。

第二

一、稻苗腐敗病

1、薬剤　ウスプルン液撒布

ウスプルンの五〇〇倍液（薬五〇瓦、水一斗四升）。

2、撒布期及び回数　種播き後五―七日目ころから一―二回。

3、方法　浅水とし、噴霧機か如露で薬剤を一坪五合の割で撒布し、一時間後に灌水する。

4、注意　一坪当り、ウスプルン三匁を水一升ぐらいに溶かして注ぎこみ、苗代の水を二寸に保つておいてもよいが、この場合もし苗代水の浅いときは、それにしたがつてウスプルンの量も減らすこと。

二、ボルドウ液或は銅製剤液撒布

1、薬剤　六斗式ボルドウ液（硫酸銅一二〇匁、生石灰一二〇匁、水六斗）、又は王銅或はクボイド液（薬一二―一五匁、水一斗）。

2、撒布期及び回数　苗代期又は田植頃から二―三回。

3、撒布量　一反当り九三三―一三三匁（三●五―五旺）。

4、注意　撒粉機を使用すること。

第四

一、稻熱病

ボルドウ液或は銅製剤液撒布

1、薬剤　六―八斗式石灰二―三倍ボルドウ液（硫酸銅一二〇匁、生石灰二四〇―三六〇匁、カゼイン展着剤二四―三二匁）、又は王銅液（薬一二〇匁、水一石、カゼイン展着剤四〇匁）、或はクボイド液（薬一二〇匁、水一石）。

2、撒布期及び回数　七月中旬（分けつ期）、七月下旬（穂ばらみ期）及び八月上旬（穂揃期）の三回。

3、撒布量　一反当り六―八斗以上。

4、注意

㈠発病状況によつては、前記の時期よりも早目に撒布すること。

㈡発病の際は、病葉を摘みとるか、刈りとつた後で、撒布すること。

㈢出穂後は八斗式石灰三倍ボルドウ液を撒布する事。

㈣噴霧口は穂から一尺以上を隔てゝ撒布すること。

㈤、開花中に撒布すれば、籾殻を黒変することもあるが、收量には悪影響がないから、発病のはげしいときには心配しないで続行すること。

【麥】

第二

一、種麦消毒

1、風呂湯浸法

1、風呂湯の温度　大麦、裸麦及び燕麦は攝氏四六度（華氏一一五度）、小麦は攝氏四七度（華氏一一七度）。

2、浸漬時間　一〇時間ぐらい。

3、方法　夜九時ころ、入浴の終つた風呂湯を所定の温度とし、残火と灰とを去り、この中に笊か袋などに入れた麦種子を浸し、湯蓋をして、翌朝までおき、翌朝七時ころとりあげたなら、すぐ水をかけて冷やし、莚に薄く拡げて水をきり、すぐ播く。

4、注意

㈠麦種子は直接釜壁につけないように注意すること。

㈡天候や仕事の都合ですぐ播けないときは陰乾しにしておくこと。

二、水銀製剤（液剤）消毒法

1、薬剤　消毒液……ウスプルン又はメルクロンの一〇〇倍液（薬五〇瓦、水二斗八升）。補充液……ウスプルン又はメルクロンの五〇〇倍液（薬五〇瓦、水一斗四升）。

2、浸漬時間　一―三時間。

3、方法　笊か袋に入れた麦種子を消毒液に浸し、二―三回あげ入れて内部にも早く浸みこませ、浸面に浮んだごみを除き、そのまゝ一―三時間浸すか、又は一〇分ぐらい浸した後引きあげ、濾莚で包むか、肥桶などに入れて一―三時間放置するか。二回目からは、消毒液の減つた量だけを、補充液で補つて続行する。

4、注意

㈠同じ液を三回ぐらいまで繰り返して使用すること。

㈡裸黒穂病を防除しようとするときは風呂湯浸法によること。

三、水銀製剤（粉剤）消毒法

1、薬剤　セレサン又はメルクロンダスト。

2、使用量　種子重量の一〇〇〇分の三。

3、方法　種の少いときは紙箱或は瓶などを用い、多いときは石油空鑵或は粉剤混合機などを使用し、容器の三分の一ぐらいに相当する麦種子と、この種子重量の一〇〇〇分の三、大体麦種子一升に対し一・三三匁（五瓦）ぐらいの薬剤を投じ、一―二分間上下左右に振り動かすか回轉して、薬剤が種子の表面によく附いたなら止める。

4、注意

㈠消毒の時期を選ばないから、予め暇なとき消毒しておくこと。

㈡裸黒穂病を防除しようとするときは風呂湯浸法によること。

第三

雪腐病

一、水銀製剤（粉剤）撒布

1、薬剤　セレサン或はメルクロンダストと消石灰。

2、撒布時期及び回数　根雪一〇日前と根雪直前との二回。

3、撒布量　一反当りセレサン或はメルクロンダスト（薬一五〇―三〇〇匁（五六三―一一二五匁）又は水和硫黄剤一〇〇倍液（原液一升、水一二五〇匁、水一石、カゼイン展着剤五〇匁）又は水和硫黄剤液撒布

1、薬剤　規格石灰硫黄合剤一〇〇倍液（原液一升、水一石、カゼイン展着剤五〇匁）又は水和硫黄剤液（薬一二五〇匁、水一石、カゼイン展着剤五〇匁）。

2、撒布期及び回数　五月中旬（出穂直前）、五月下旬（出穂揃）及び六月上旬（乳熟期）の三回。

3、撒布量　一反当り一石―一石五斗。

4、注意

㈠撒布期は発病状況によつて加減すること。

㈡霖雨のときには被害がはげしいから、葉上の露の乾く程度の晴間があつたなら、遅滞なく撒布すること。

㈢展着剤として石鹸類を混合しないこと。

二、硫黄粉剤撒布

1、薬剤　硫黄（五〇％）粉剤。

2、撒布期及び回数　石灰硫黄合剤の場合と同様。

3、撒布量　一反当り　九三三―一三三〇匁（三●五―五旺）。

4、注意　撒布機を使用すること。

【甘藷】

第一

甘藷黒斑病

一、水銀製剤消毒法

1、薬剤　ウスプルン又はメルクロンの八〇〇倍液（薬五〇瓦、水二斗二升）。

2、浸漬時間　一五分。

3、方法　種薯の場合は、一五分間浸漬消毒してから、苗床に伏せ、苗の場合は、一〇〇本ぐらいを一束とし、二―三箇所をたばね、その株元二―三寸を一五分間浸漬してから植える。

4、注意

㈠種薯には健全なものを厳選すること。

㈡貯蔵用の種薯も、この方法で消毒を行い、陰乾してから、貯蔵すること。

二、温湯消毒法

1、湯の温度　攝氏四七―四八度（華氏一一七―一一八度）。

2、浸漬時間　種薯の場合四〇分、苗の場合一五分。

3、方法　種薯の場合は、四〇分間浸漬消毒してから、直ぐ苗床に伏せ、苗の場合は、一〇〇本ぐらいを一束とし、二―三箇所をたばね、その株元二―三寸を一五分間浸漬してから植える。

【馬鈴薯】

第一

種薯消毒

一、ウスプルン液消毒法

1、薬剤　ウスプルン七〇〇―八〇〇倍液（薬五〇瓦、水一斗九升―二斗二升）。

2、浸漬時間　二〇分。

3、方法　種薯を切断したなら、直ぐ前記の薬剤で消毒し、成る可く早く播くか、水洗いしてから播く。

4、注意

㈠種薯には健全なもの（特に輪腐病に注意）を選ぶこと。

㈡種薯は切断してから消毒すること。

馬鈴薯疫病及びでんとうむしだまし

第二

一、砒酸石灰液撒布

1、薬剤　砒酸石灰液（薬二〇〇匁、水一石、カゼイン展着剤三〇匁）。

2、撒布期及び回数　てんとうむしだましの成虫が馬鈴薯畑に押寄せてくる時期と、その後一〇日目頃の二回

3、撒布量　一反当り一石。

4、注意　疫病防除と同時に駆除するときは、砒酸石灰をボルドウ液或は銅製剤液に混合して撒布すること。

二、ボルドウ液又は銅製剤液撒布

1、薬剤　六斗式ボルドウ液（硫酸銅一二〇匁、生石灰一二〇匁、水一石、カゼイン展着剤一八匁）、又は王銅液（薬一五〇匁、水一石、カゼイン展着剤三〇匁）、或はクボイド液（薬一五〇匁、水一石）。

2、撒布期及び回数　六月上旬（開花始）、六月中旬（開花盛）及び六月下旬（開花終）の三回。

3、撒布量　一反当り六斗―一石二斗。

4、注意

㈠ボルドウ液又は銅製剤液の撒布は、馬鈴薯の増收上効果が多いから、病害虫発生の有無に拘らず、必ず実行すること。

㈡ボルドウ液又は銅製剤液の撒布とともに、砒酸石灰液を撒布する必要のあるときは、前記の薬液一石に対して砒酸石灰二〇〇匁を溶かして撒布すること。

㈢展着剤として石鹸類を混合しないこと。

三、銅粉剤撒布

1、薬剤　銅（六％）粉剤。

2、撒布期及び回数　ボルドウ液の場合と同様。

3、撒布量　一反当り　九三三―一三三三匁（三●五―五旺）。

4、注意

㈠砒酸石灰液を撒布する必要のあるときは、前記の粉剤九三三―一三三三匁に砒酸石灰を粉剤のまゝ二〇〇匁の割で混ぜて撒粉すること。

㈡撒粉機を使用すること。

昭和二十四年三月

宮城縣經濟部農業改良課

植物防疫資料館
C-504-4045
寄贈
D
2-3
919